

# 日常会話に現れる「自己」の存在形式とその利用

## —自己呈示発話の会話分析—

横浜国立大学大学院 環境情報学府

博士課程後期 小池 高史

The Existence Form and the Use of the "Self" in Everyday Conversations —The Conversation Analysis of the Self-presentation Utterances—

Takashi KOIKE

Post Graduate Student: Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

### 要旨

本稿では、会話分析研究の一つとして、日常会話の中に現れる自己呈示発話がどのように利用されているかを検討する。

そのためにまず、自己呈示発話が会話の中でどのような場所に現れるのか、それがその場においてどのような意味を持っているのかということについての分析を行う。分析素材として、映画作品の中の会話断片と映画シナリオの中の会話断片を用いる。

本稿の問題関心は、クルターが行なった「わたし」という語の概念分析を引き継ぐものであるが、本稿では、そこからさらに一步踏み込んで、「わたし」という語を修飾する発話の有する機能について検討する。

分析結果から、自己呈示発話の利用が自己概念にまつわる常識の利用であることを明らかにする。

### SUMMARY

This paper examines how self-presentation utterances in everyday conversations are used as one of the Conversation Analysis studies.

For that purpose, this paper analyzes about where self-presentation utterances appear in conversations and what kinds of meaning they have in the place first. As analysis materials, this paper uses conversation pieces in motion pictures and in movie scenarios.

The interest of this paper takes over from the concept analysis of the word "I" whom J・Coulter performed, but, by this paper, in addition examines the function that utterances modifying the word "I" have.

From the outcome, this paper demonstrates that the use of self-presentation utterances is the use of the common sense concerned with the self-concept.

## 1 はじめに

私たちは普段、誰かと会話をする中で頻繁に自分のことを話す。聞かれもしないのに自分のことを話します。この「自分のことを話す」ということ（及びその内容）も、社会学の研究者によって研究対象とされてきた。そこで主に注目され、扱われてきたものは、「自己語り」と呼びうるようなある程度の分量とまとまりをもった自分についての発話である。それは一方で、個人が体験した過去の出来事についてのインタビューから、その個人や出来事、あるいは社会一般について理解しようとする「ライフストーリー・インタビュー」という方法論としても（桜井・小林 2005）、また他方で、ガーゲンによって提案された「自己語りこそが自己だ」と主張する自己物語論という自己理論としても、社会学者の議論の的となってきた（Gergen&Gergen1983、浅野 2001、Loseke2003）。

しかしながら、日常会話の中で

生じる発話者自身についての発話には、自己語りだけでなく、単発的に簡潔な言葉だけで自分を表現する発話もある。サックスによって創始された会話分析の立場からすれば、それも一つの興味深い分析対象となるのである。

本稿においては、この単発的に簡潔な言葉だけで自分を表現する発話を「自己呈示発話」と呼ぶことにする。それは、「私はこうだ」というように「わたし」という語（主語）<sup>(1)</sup>を修飾する述語の形で現れる発話である。

例えば、データ1の05行目の発話が、本稿でいうところの自己呈示発話の一つに数えられる。

#### 【データ1】

((プロの写真家に写真を撮ってもらうように勧める))

01 マリ hhね:垂弥子:>あんたも撮ってもらったらく

02 垂弥子 (.)わたし?(.)わたしはいい[よ:

03 マリ [い::じゃない,>あのね<口は悪いけど、腕はま

04 んざらでもないのよ.hhhh=

05 垂弥子 =わたし写真苦手だから.=

06 マリ =° そっか° (2)、(3)

日常生活における「自己呈示」という問題については、ゴッフマンによる重要な先行研究がある。ゴッフマンは、日常生活を送る人々も、舞台上に立つ役者と同じように他人にどのように見られるかを意識して（あるいは無意識に）、自己呈示を行なっていることに注目した（Goffman1959=1974）。本稿の関心は、同じ自己呈示であってもゴッフマンの関心とは若干ずれている。本稿で注目するのは、他人に自分の都合のよい自己を提示しようとする自己呈示というよりも、会話という相互行為を円滑に進めるために利用される（必ずしも自分に都合のよいものばかりではない）自己呈示である。

本稿では、こういった自己呈示発話が会話の中でどのような場所に現れるのか、それがその場においてどのような意味を持っているのかということについて考えてみたい。その検討を通して、自己という概念についての常識を、私たちが日常会話の中でどのように利用しているか明らかにする。

## 2 クルターの「わたし」論

具体的な検討に入る前に、本稿の理論的背景について述べておく。本論考の発想は、その多くの部分をクルターに代表されるヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの考え方によっている。

クルターは、心の中で起こることとされる現象を、構成主義の立場からではなくエスノメソドロロジーの立場から、相互行為の中で生じる社会的構成物として扱う。自己という現象も、その心的現象の一つに含まれている。クルターの研究が心的述語の「使用中の論理」（1979 = 1998）を問うものであったとすると、本論考はその中でも自己呈示発話の使用中の論理を問うものだと位置づけられるだろう。

また、西阪（1997、2001）は、クルターが対象としたものと同じものを研究するにあたって、会話分析の手法を積極的に取り入れるという試みをしている。本論考も会話データから自己を修飾する述語について考えていく。その意味で本論考は、西阪の研究から多くを引き継いでいる。

またクルター（1979 = 1998）は、ミード、フロイト、フッサール、サルトル、ゴッフマンらによって心理学・哲学・社会学の立場から考えられてきた「自己」や「自我」についての議論を否定し、エスノメソドロロジーの立場から「わたし」という概念について研究することを提案している。それは、自己についての検討可能な問いを再定式化することでもあった。すなわち、どのような紋切り型の思考手順によって、ある行為を誰か

の特別な個性に帰属させているのか。日常生活における行為が、誰かの個性に言及して説明される際、そこにどんな前提が存在しているのか、といった以下の個所で表現される問いである。

私たちの公的な言語が、私たちの「主観的あり方」への内面的評価を規定しているというのは、こういうことである。私たちは、それぞれそれらのあり方に対する限られた権限を有し、しばしば許された実際の権限は、言語資源の間違った使い方と間違った判断によって与えられた偽りの権限である。しかし、「私的」な領域というものを狭く考えたとしても、人間存在の核には哲学者や心理学者が、「自我」や「自己」と様々に呼ぶものが残るといふ強固な信念がくつがえされることはない。

以下で、私はこのFeiglのいうところの「法則論につきまとうもの」を捨て去りたい。まずは、「自我」や「自己」の概念が心理学や哲学の理論において説明のための虚構物として機能していることを論証するところから始めよう。それは、人間の行為を誤って解釈する理論の、一種の抽象的な間に合わせとして機能している。それから、この概念が特にフロイトとフッサールの意識に関する間違った図解において、どのように機能しているかを示そう。そして、「I」の概念に関する、それらと全く違った見解を示そうと思う。それは Gunderson がいうところの「存在論的に有益な」主観についての見方と結びついた「I」に関する見方である。（pp108 - 109）<sup>(4)</sup>

ここで彼が述べている、「存在論的に有益な主観についての見方」とは、ヴィトゲンシュタインの言語哲学やエスノメソドロロジーの発想から、相互行為の中で「I」という言葉がどのように使われているかという点に、「I」の存在の本質があるとする見方である。つまり、

「I」の概念を捉えどころのない下位概念や不透明な存在論上の謎として捉えるのではなく、それが日常の言語活動でどのように使われているかに注意を払うべきである。（p121）

その見方から、彼はまず次のように論じる。

「this」や「now」のような、話されている文脈の中で何かを特定するために用いられる指標語と同様、「I」は話し手を特定する。「this」という指標語は、話されている事柄や、議論上の事物、人物、

#### 【データ1】(再掲)

((プロの写真家に写真を撮ってもらうように勧める))

01 マリ hh ね: 亜弥子: > あんたも撮ってもらったらく

02 亜弥子 (.) わたし? (.) わたしはいい [よ:

03 マリ [い:: じゃない, > あね<口は悪いけど, 腕はま

04 んざらでもないのよ. hhhh=

05 亜弥子 =わたし写真苦手だから. =

06 マリ =° そっか°

出来事や、知覚的な指示を表し、「now」は、実際の会話中の瞬間（あるいは時間帯）を表す。(p121)

つまり、彼は「I」という言葉自体の機能を分析し、

複雑で他の言語使用と絡み合っているが、「I」の概念は心理学的な意味で謎ではない。この概念にまとわりつく謎は、日常会話の中でのその実際の機能を取り違えていることから生じている。「I」は、経験において私の内面のどこかにある精神的な中心を意味しているのではない。会話の中で体や体の一部を表すことはあり得るが、それはある完全なもの名前ではない。(p123)

と断定する。

「わたし」という語の相互行為中の使用法をさらに検討していくことも可能であると思われるが、本稿で扱うものは「わたし」自体の使われ方ではない。前節で述べたように、「わたし」という語を修飾する述語の形態で現れるものとしての自己呈示の発話がここでの研究対象である。

### 3 自己呈示発話の会話分析

本節では、いくつかの会話データを分析し、その中に含まれる自己呈示発話の特徴を記述していく。次節でそれらの分析を踏まえて、自己呈示発話に共通する特徴・性質についてまとめる。

ここで分析対象として取り上げる会話断片は、映画シナリオの中の会話場面と、映画作品の中の会話場면을会話分析の手法により書き起こしたものである。

#### 3.1 勧誘に対する辞退の理由としての自己呈示発話

まずは、冒頭で言及したデータ1から始める。

01 行目でマリは、写真を撮ってもらうことを会話の相手に勧める（勧誘）ということを行っている。それを受けて02 亜弥子の発話で勧誘に対する辞退がな

されるが、その発話とオーバーラップして再度の強い語調での勧誘（い:: じゃない）がなされている。その後自己呈示による再度の辞退の発話があり、それを受けて06 マリの弱い語調による承認の発話（° そっか°）が生じている。

03と06の間の語調の変化は、何を意味しているのだろうか。端的に言えば、05の自己呈示の発話がこの話題を穏便な終了に導いているということである。ここで05行目の発話は、相手の勧誘に対する直接的な辞退の言葉の代わりとなっている。勧誘に対し直接的な辞退の言葉でそれを拒むことは相手に好ましくない印象を与えかねない。ここでは、直接的な辞退の言葉の代わりに自己呈示発話が為されることによって、それが回避されているのである。

さらに、この自己呈示による辞退の発話からは、会話上の自己がどんな時に現れるのが適切かという問題も見えてくる。類似した問題を西阪（2001）は記憶と想起についての文脈で述べている。

何が規範的に忘れてもよいものかは、じつは現在の社会的活動のいかにかかっている。ドイツ語を忘れていてよいかどうか、私が誰としてどのような場面で何に携わっているかにかかっている。ドイツ語の教師として上級ドイツ語のクラスでドイツ語講読を指導しているとき「sich erinnern」の意味を忘れてしまっていることは、規範的に許容されえない。記憶は、当面の社会的活動の規範的秩序のなかに埋め込まれている。「憶えている」か「いない」という問い自体がレリバントであるのは、そのつど当面の社会的活動の規範的秩序において（その活動の参与者たちにとって）のみである。

そのつどの社会的活動の規範的秩序のなかに埋め込まれているという点では、想起も同じである。実際、忘却に規範的制約があるかぎり、想起にも同様の制約があるはずだ。私が「日本語の「思い出す」という動詞の意味を思い出した」などと言えば、やはり私の基本的な能力は疑わしくなるだろう。(p158)

### 【データ2】

(由香、相撲部の勧誘ピラを差し出すが、断られる)

- 01 由香 どうですか:>女の子もく大歓迎ですよ  
02 女子学生A (.)すもう::?  
03 女子学生B いいよね::<sup>(5)</sup>

### 【データ3】

- 01 駅員 <バンクーバーって:>,(.)どこですか?  
02 北原 (1)カナダ.h(2.0)新しいバックツアーなんだよ.(0.5)行く?  
03 駅員 (1.5)>いや<無理(h)っすよ:.(1)>俺<だって>カナダ語喋れないくし.<sup>(6)</sup>

たとえ文法的に間違っていないとも、ある日本人が「日本語の「思い出す」という動詞の意味を思い出した」と発話することは逸脱行動とみなされる。それは記憶と想起に関わる事柄だけが持っている特別な特徴なのではない。誰がどんな場面で何を話すかは、常に社会的規範によって判断されるものなのである。自己に関わる事柄の発話も、当然その例外ではない。例えばデータ1の中に含まれているのが、

マリ「亜弥子、あんたも撮ってもらったら？」  
亜弥子「そうだね、私、写真得意だから」

という発話連鎖だったら、かなり違和感がある。私たちは普通こういうことは言わないのである。「写真得意だから」の代わりに「写真撮られるの好きだし」などであったら、その違和感は薄らぐが、それでも少しおかしいという印象は残る。

つまり勧誘に対して受諾で受けることのできる場合には、自己呈示の発話は必要ない。必要ないだけでなく、それはあってはならないものなのである。サックスは「相手が知っていることを語ってはいけない」という会話上のルールを観察している(Sacks 1992、西阪 2001)。写真を撮られることを受諾するのであれば、それが苦手だったり嫌いだったりしないことは了解済みのことである。勧誘に対する受諾の後の自己呈示は、了解済みのことをわざわざ語ることと等しくなってしまう。

さらに、ここでの勧誘内容、せっかくの機会にプロの写真家に写真を撮ってもらうことは、若い女性にとって受諾されることが予想されている提案といえるだろう。それを辞退するために、「写真が苦手」という自己を呈示することが必要になっている。逆にいえば、辞退されることが予想されるような勧誘であったら、それを辞退するときに自己呈示は必要ないだろう。

例えば、データ2の会話では、反対に01由香の発話が断られることが予想されている勧誘であるため、その辞退に特別な理由は必要ないのである。

ここで自己呈示の発話が現れる適切な場所として、「受諾することを予想されているような勧誘を辞退するとき」を挙げることができるだろう。

データ1と同様の会話断片について考えてみよう。

データ3でも勧誘に対する辞退が行われている。「>俺<だって>カナダ語喋れないくし。」という自己呈示が辞退の理由として意味づけられている。

それは、直接の辞退の発話の後、約1秒の間を置いて、速い語調で付け加えられている。約1秒の間は、発話交替の機会(Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)として観察可能である。

ここで発話交替が行われなかったことは、二つのことを意味する可能性がある。第一に、相手が辞退の理由を求めているということ。第二に、この発話がまだ完了していない、辞退の理由まで述べられて完了するものだと捉えられているということ、である。

ここで注意すべきことは、実際に相手がそのように考えているかどうかは、問題ではないということである。問題なのは、当人の心の中がどうであるかに関わらず、「発話交替が行われなかったことによって、理由の言明が要求される」、という規則が働いているということであり、それに従ったように見える会話断片がここにあるということである。

クルターによれば、重要なのは

心的生活(それをどのように理解するにしても)にとって社会的世界とその世界内における社会的活動の組織化こそ基本的なものであること、このことである。ほんとうの意図、ほんとうの動機、ほんとうの考え、ほんとうの理解、これらはいくまでも社会現象である。たとえ様々な個別ケースで、心的述語の一人称帰属(つまり表面)について当事者間で

#### 【データ4】

- 01 北原 >君<は: (1.0)どこに行くんだ  
02 アフロヘア (.)せんじょ: (.). hせん火の>町の写真<何枚か<とって: (.)<コンビニ  
03 で>買い物. hh 僕. <コンバットフォトグラファー>だから: (.). h<sup>(7)</sup>

の合意達成が覚束ないままのこともあったり、また、自分の考えや意図などをあくまでも自分だけの秘密にとどめておくことがあるとしても、である。このような事態は、実証主義的な研究にとってはいつも問題となる。しかし、本書で提案される構想にしたがって研究をすすめるかぎり、「隠蔽」問題もしくは「秘匿」問題は、原理的にも実際上も、なんら問題にならないはずである。考えや意図などは、たしかに隠蔽可能である。しかしだからといって、考えや意図などが純粹社会学的に分析可能であると主張できなくなることなど、あるはずがない。(1979 = 1998、訳書 p 20)

つまり、相手の意図がどうであるにせよ、直接の辞退の言葉だけでは発話交替が生じなかったことにより、勧誘が受諾されることを予想されていた勧誘として可視化され、辞退の理由として自己呈示が必要となったのである。

ここでは、受諾することを予想されている勧誘に対する辞退の理由としての自己呈示について述べてきた。これはクルターがいうところの「申し出に対する拒絶の一つの特徴としての情報提供的打ち明け（陳述）」の中に含まれるものである。その例として彼が挙げている次の想定会話は、ここで見てきた会話断片とかなり似ている。

A：家まで車で送ろうか？

B：そとに車を止めてあるんだ。（1979 = 1998、訳書 pp58 - 59）

情報提供的打ち明けの中でも自己によるそれは、ある特別な意味合いを帯びて可視化されているように思われる。だが、その点については他の種類の自己呈示の発話例を検討した後でまとめることにする。

### 3.2 動機を表す自己呈示発話

次に、何らかの行動の動機を表す、あるいは動機を表す発話の代わりとなる自己呈示の発話について検討する。クルター（1979 = 1998）は、動機を心的述語の使用法の一つとし、ブラムとマッキューの次のような動機論を引用している。

かれらにとって動機とは、もっぱら、「社会的環境を秩序だった、理解可能なものに整序するための理由づけ装置にほかならない。つまり、動機は、けっして、行為の原因となっているわけでもなければ、心的な原動力であるわけでもない。（訳書 p109）

データ4の03行目で、「僕、<コンバットフォトグラファー>だから: (.). h」という発話は、「戦場へ行き、写真を撮る」という行動の動機を表すものとして機能している。それは、例えば「(.)せんじょ: (.). hせん火の>町の写真<何枚か<とって: (.)<コンビニで>買い物. hh」という発話の後、発話交代が行われ、「どうして？」と聞かれたときに、その問いへの応答として適切なものだと思われられることが予想できるという意味で、である。

クルター（1979 = 1998）は、動機についてさらに次のようにも述べている。

ふだん動機について語るとき（たとえば動機を帰属したり表明したりするとき）、わたしたちは、理由づけや言語使用のための前論理的な慣習にしたがっている。この前論理的慣習がいかなるものであるかを特定すること、これこそ経験的研究者の課題でなければならない。（訳書 p111）

コンバットフォトグラファーだから戦場で写真を撮るという説明は、この社会ではおかしくないものとされている。その非意識的・前論理的な知識を用いて、彼は動機を述べ、この会話を理解可能で秩序だった会話として観察可能にしているのである。

しかし考えてみれば、心的述語の中でも特に自己を修飾する述語は、動機について語るときに特徴的に現れるように思われる。自己を修飾する述語でない心的述語として、「～だと思ふ」という言い方を例に挙げて考えてみよう。例えば、データ4の会話が以下のものであったらどうであろうか。

北原「君はどこ行くんだ？」

アフロヘア「戦場。戦火の町の写真何枚か撮って、コンビニで買い物。何か面白いものが撮れるんじゃないかと思うから」

【データ4】(再掲)

01 北原 >君<は : , (1.0) どこに行くんだ  
 02 アフロヘア (.)せんじょ : . (.) . hせん火の>町の写真<何枚か<とって : (.)<コンビニ  
 03 で>買い物. hh僕 <コンバットフ オトグラファー>だから : . h

これも確かに心的述語を使って動機を述べている。しかしこれでは、

北原「君はどこ行くんだ？」  
 アフロヘア「戦場。戦火の町の写真何枚か撮って、コンビニで買い物。何か面白いものが撮れるんじゃないかと思うから」  
 北原「どうしてそう思うんだい？」

というように、会話が継続していく可能性がある。そのため、会話を簡潔に終了させたい場合には適していない。また、

北原「君はどこ行くんだ？」  
 アフロヘア「戦場。戦火の町の写真何枚か撮って、コンビニで買い物。僕、コンバットフォトグラファーだから」  
 北原「どうしてコンバットフォトグラファーなんだい？」

とは普通返さない。もしこのような返事があったら、それは「ふざけている」や「おちょくっている」と捉えられる可能性がある。つまり、自己呈示は何らかの行動の動機を簡潔に語ろうとする場合に、便利なものだということがいえるだろう。

これはしかし、どちらの動機がより行為の原因として大きなものかといった問題ではもちろんないし、どちらが先にあってどちらが後にくるといった問題でもない。また、状況によってこういった動機語りが適切なものとなるかも変わってくるだろう。自己呈示による動機語りが適切でない、という場面も当然存在する。

ここでもう一度、データ4の会話断片を見返してみよう。

ここまで、「僕、<コンバットフォトグラファー>だから : . h」という発話を取り上げ、それが動機を語るものとして述べてきたが、データ4に表れているこの発話の発せられ方に注目することで、この発話が持っているもう一つの意味合いが見えてくる。

第一に、「コンバットフォトグラファー」の

部分がゆっくりとした語調で発話されている。第二に、「コ」と「グ」の音が強い語調で発話されている。実際に声に出してみるとわかるが、これは奇妙なアクセントである。

これらのことによって、この部分の発話から、相手をバカにしているような印象を受ける。それはつまり、この自己呈示が動機を語ると同時に、相手の質問を質問として適切でないもの、当たり前のことを聞く質問であるということを示す機能を持っているということである。

会話の中に現れる自己には、動機について語る際、特徴的に現れるものがあり、その中には、相手の質問を無意味なものとして意味づける現れ方をしているものがある。これがその中の自己呈示の発話に注目して、データ4から見出されたことである。

### 3.3 信用させるための自己呈示発話

次に見ていくデータ5の会話断片は密談の場面に生じたものである。ここでは秘密を守れるということを示すために相手に信用（納得）させるために自己呈示の発話が見られている。

データ5の中で、件の自己呈示発話が見られているのは11みすずにおいてであるが、それ以前の会話から順をおって見ていこう。

まずは01～07までの岸の発話であるが、間にな

【データ5】

01 岸 >みすず<  
 02 (3.0)  
 03 岸 これからの話しは他言無用だ。  
 04 (1.5)  
 05 岸 Bの連中<sup>o</sup>にも<sup>o</sup>。  
 06 (2.5)  
 07 岸 >まもれるか(h)<  
 08 (4.0)  
 09 みすず ((うなずく))  
 10 (7.0)  
 11 みすず <だいじょうぶ(h). h>. は(h)なすのは(0.5)<sup>o</sup> 苦手だから<sup>o</sup>。  
 12 (5.5)  
 13 岸 そ(h)うだ<sup>na</sup>(<sup>o</sup>)

り長めの間隔を取りながら、飛び飛びに発せられている。それは、01 岸と 07 岸での速い語調、それから 05 岸で語尾が弱い語調になっていることとともに、「緊張していること」を観察可能にしている（もちろん本当に彼が緊張しているかどうかは、ここでは問題でない）。

その後、約 4 秒の間をおいて、質問への言葉による回答の代わりとして、相手のうなずきがある。この約 4 秒の間は、「相手の緊張を感じていること」、「真剣な話であることを理解しているということ」を観察可能にする間である。

それを受けての 10 の約 7 秒の沈黙は、3 節で述べた発話交替の機会であったのに交替が行われなかったこととして可視化されている<sup>9)</sup>。そしてそれと同時に、相手が「回答に完全に納得していないこと」、「回答の続きを求めていること」が観察可能なものとして立ち現われてきている。

そこで生じるのが 11 みすずの自己呈示の発話である。前半部のゆっくりとした語調、発話途中の息継ぎ、それを挟んでの後半部（自己呈示発話）の弱い語調による発話終了など、この発話の発話され方を構成する要素のそれぞれが、「真剣な話しに参加していること」を示すことに与している。

11 みすずの発話も、データ 1 の 02 垂弥子、05 垂弥子やデータ 3 の 03 駅員、データ 4 の 02、03 アフロヘアと同様に「応答+その補足としての自己呈示」という形式をとっているが、11 みすずにはこれまでに見てきた他の自己呈示と区別される点がある。それは、この発話が会話の相手と共有している自己について語っているということであり、そのため、相手に想起という心的現象を要求するものとなっている。

そして実際には、この発話の後にくる約 5.5 秒の間によって、岸が想起していることが可視化されている。記憶と想起について、西阪は次のように述べている。

私たちは、たとえば記憶とは何かと問われるならば、さしあたり次の二点をもって記憶の本質と考えたくなる。第一に、眼前にないことがらが何らかのかたちで（頭蓋のなかに）記憶として保存されている。だから、何らかの心的イメージのようなものが、記憶の内容となっている、と。第二に、必ず過去の「痕跡」が（無意識にであれ）神経系に残されていなければならない、と。このような考え方に対抗するために、ふたたび二つのことを確認しておこう。

第一に、「記憶をもつ」も「想起する」も、「認識する」あるいは「見る」と同様、達成もしくは成功

を表わす表現である。「X の記憶をもつ」も「X を想起する」もいずれも、X が事実であることを含意する。だから、ある人が「X の記憶をもつ」と主張するとき、その主張は公的に（原則として誰でもが）近づくことのできる状況内の様々な手がかりにより、反駁可能である。そのかぎり、その「X の記憶」はその人自身に閉ざされたものでは、けっしてない。（2001、pp156 - 157）

ある発言が、しばしばあえて「記憶を語ること」としてなされることがあるのだ。かれらは、しばしば「記憶を語ること」もしくは「想起すること」を実際にやる。これが、当該の社会的活動のなかでどのようになされ、何をなし遂げようとしているのか。この間に答えることが、「記憶」の相互行為分析の一つの課題となりうる。（1997、p 216）

このように西阪は、相互行為の中で私たちが「想起の試み」を行うことに注目する。彼が提示するのは例えば次のような例である。

- 1 C: あ、(,) 何時から。
- 2 A: え …… と、2 時です。(p164)

西阪は、2A の「え …… と」が「想起を試みていること」を相互行為の中で公然化していると記述するが、データ 5 の 12 の間隔も、同様に岸の想起の試みを公然化するものだといえよう。

ここでの想起はしかし、その後の「そ(h)うだな」という承認の発話とセットで考えるべきだろう。呼気音とともに発せられ、強い語調で終了する肯定の応答が次に生じている。それはさかのぼって、いくつかの意味にとられる可能性のある沈黙が想起の試みであったことを可視化させている。

「当人たちの過去を振り返り、発話内容の指摘するところにあたる記憶を想起し、発話内容の意図を理解したこと」を示す。これが 11 みすずの自己呈示発話によって筋道付けられた相手の反応である。それはそのまま「他言無用」を守れるという回答の理由に納得したということを示す反応であり、その回答を信用するということが同時に公然化されているのである。

### 3.4 お世辞に対する自己呈示発話

ポメラントはお世辞とそれに対する返答を会話分析的に研究している。ポメラントによれば、お世辞に対する返答には「二つのシステムが作用しているように

### 【データ6】

牧村「中田って、頭いいしき。他の子たちとぜんぜん違うっていうか、なんかミステリアスでさあ」

由香「ミステリアス？（小さく笑って）よく言うよ、私はただの貧乏人だよ」<sup>(10)</sup>

思われる。その一つは「お世辞を是認、承認、肯定するなどの返答」のシステムであり、二つ目は賞賛を回避するシステムである。これは賞賛を切り下げたり、あるいは賞賛の対象を自己よりも他のものに切り替えることによって、お世辞のお返しに代表される別の形態をとまって行われる」（Psathas1995 = 1998、訳書 p 98 から重引）。

ここでいわれている二つ目のシステム、「賞賛を回避するシステム」に注目し、自己を修飾する述語が、そのシステムの中である特徴的な機能を持ちうることにについて考察したい。

「お世辞のお返しに代表される別の形態」の一つとして、ポメラントが提示するのは、「賞賛の与え手の側が誇張している、過大視している、極端であることを示すこと」（Psathas 1995 = 1998、訳書 p 95 から重引）である。その例としては、次のようなものが紹介されている。

A：ナイス シュート

B：それほど正確じゃないけどね（Psathas 1995 = 1998、訳書 p 96 から重引）

一方、データ6にある返答は、これと同じ形態であり、かつそのために自己呈示発話を用いられている。

ところで、先ほどのポメラントによる会話例には、まだ続きがある。

A：ナイス シュート

B：それほど正確じゃないけどね

A：まったく正確じゃないか、恐ろしいくらいだ  
（Psathas 1995 = 1998、訳書 pp96 - 97 から重引）

A は一度賞賛を回避されたが、その返答を否定し再度賞賛を行うことで、この賞賛連鎖を継続させている。

一方、データ6では、ポメラントの例のように賞賛側が返答の言葉を否定することが難しい。その違いはどこに起因するのだろうか。

「シュートが正確であること」は、何も最初にそれについて判断した者が特権的に判断できるものではない。それを見ていたもので（そのスポーツに精通しているもので）あれば、誰でも対等に判断できるものである。一方、「自分がただの貧乏人であること」、つま

り自己に関することは本人と他人には対等に判断権を与えられているとはいえない。

いずれにせよ、データ6の返答は、「賞賛の与え手の側が誇張している、過大視している、極端であることを示す」という形態をとりながら、賞賛連鎖を終了させるように作用している。

賞賛連鎖を終了するように作用する返答の形態として、ポメラントが記述しているのは、「お世辞のお返し」である。

C：（まったく）本当にすばらしく見える

D：そうね あなたもほんとに良く見えるわ

（Psathas 1995 = 1998、訳書 p98 から重引）

自己呈示による賞賛への不同意は、「お世辞のお返し」同様、賞賛連鎖の終了を導く。これを、賞賛回避システムの中で、自己を修飾する述語が有する特徴的な機能として位置づけることができる。

### 3.5 論理性を証明するための自己呈示発話

続いて検討するのは、自らを論理的に行為する主体として会話に参加し続けるために用いられる自己呈示発話である。私たちは、普段何気なく会話に参加しながらも、その中で自らの立場を示し合い、参照し合っている。

ここで検討する会話断片（データ7）は、知り合っ間もない者同士の間で生じたものであり、自らを論理性を持つものであるということを示すために自己を修飾する述語が用いられている。

まず01朝子で、状況の特徴づけがなされている。つまり、「知り合ったその日に相談があるといって食事誘う」ということが、何らかの説明・理由が必要な特別なこととして可視化されている。それは、「それで？何なのかな？」という言葉だけによるのではなく、「それで :(.)」という言い方、その後に来る言葉を言うのを躊躇しているように意味づけされる、語尾音の引き伸ばしと若干の間にもよっている。

続いて、それによって期待された理由を提示するという発話（02～06）がなされるが、06エミにある自己呈示、「<嗅覚>っていうんですか？あたしそういうのあるんです。」はそこで語られた理由を補うものとして生じている。

### 【データ7】

- 01 朝子 それで:(.)なんなのかな?  
02 エミ (0.5)h(1.0). hごめんなさい,今日知り合ったばかりなのに,ずうずうしくお  
03 誘いしちゃって(0.5)でも. hそうだんする人がいなかったっていうか,(1.0)自  
04 分でもどうしたらいいかわからなくなっちゃって.(1.0)>今日<初めてお会い  
05 した時にね.. hあ(h):(.)この人なら大丈夫>ていうかく,信頼できるっ>ていう  
06 かく,(1.0)<嗅覚>っていうんですか?あたしそういうのあるんです.  
07 朝子 (1.0)h(1.0)なんかの勧誘?  
08 エミ (0.5)h(.). h障害あるんですわたし.(0.5)だから:他人が自分のことどういう風  
09 に見てるんだろうって.(0.5)バカにしてるのか,(.)>それとも<大切に思っ  
10 てるの°か°. (0.5)そういう判断って,あたしすぐたいせつなんです.  
11 朝子 (.).° あ:あ:° (11)

02～06は、単に変なことをした理由を提示するだけでなく、自らを論理性をもつ主体として提示するということが同時に行っている。論理的に行動する主体は、変なことを特別な理由もなく行わない。その特別な理由を聞かれて返答するということが、「質問/応答」の隣接対的期待に従っているだけでなく、それによって論理性を証明し、継続していく会話の中で論理的な主体として参与することを準備しているのである。

しかし07朝子、「(1.0)h(1.0)なんかの勧誘？」からわかるように、02～06でのエミの論理性の証明は成功していない。それに対するのが「(0.5)h(.). h障害あるんですわたし。」という自己を修飾する述語を用いた応答である。これは、先に呈示した自己を説明するための自己呈示という形態をとっている。「私は障害があり、そのため(人を判断する)嗅覚がある」という自己呈示がなされ、「だから、知り合ったばかりの人であるが食事に誘った」と、論理性証明の達成が試みられている。

## 4 結論

クルターは、会話の中に現れる「わたし」という語が話し手を特定する指標語だとした。本稿では、クルターの問題関心であった相互行為における「わたし」という言葉の使われ方の検討からさらに一步踏み込んで、「わたし」という語を修飾する述語の形態で現れるものとしての自己呈示の発話が有する機能について検討してきた。ここでは、それらの機能があるということから、会話の中の自己呈示がそもそもどのようなものとして意味づけられているのかということを考えてみたい。

データ1では、再勧誘に対する再辞退の発話におい

て、自己呈示が現れていた。そのことから見てとれるのは、勧誘や質問など隣接対の第一部分となり得る発話で始められた会話連鎖が、一対だけで終わらず、継続していく場合、自己呈示発話でそれを終了させる作用をもたらすことがあるということである。発話連鎖が継続する場合でなくとも、データ3、データ4、データ5、データ6、データ7<sup>(12)</sup>と、自己呈示の発話は隣接対第2部分として特徴的に現れ、ある発話連鎖を終了させるように、会話中の話題を変えるように作用していた。

それはおそらく、会話中に現れる自己(「わたし」を修飾する述語で示されるもの)が、それが話題としている主体に、それについて判断する優先権があるものとして意味づけられることによっている。3.1で情報提供的打ち明けについて触れた。自己呈示の発話は基本的にこの形態の一つとして生じるが、その中でも自己を用いたものは、判断優先権という特徴を有し、発話連鎖の終了をもたらしやすい状況をつくる効果があるのである。

自己が会話上で用いられる時、当人にそれに対する判断の優先権があるという記述は、つまり自己は私的領域にあるものだという常識的な見解を語り直しているだけのことと思われるかもしれない。しかし、判断優先権が認められているのは、あくまで公的な領域のことだ。本稿での検討が明らかにしたのは、そのような見解は一つの常識となっているのであり、その常識、自己現象が私的領域に含まれるものだという常識を、私たちが相互行為の中で利用しているということである。逆にいえば、自己呈示発話を発話連鎖を終了させるものとして利用するということによって、自己現象が私的領域に含まれるものだという常識が維持されているということでもある。

「自己は私的領域にある」という見解は、常識を述

べることの延長上にあるが、本稿は会話を分析するところから、その常識を私たちがどのように利用しているかを明らかにした。

(注)

- (1) 日本語会話の場合、主語は明示的に表れないことも多いが、それは常にそこにあってもおかしくないものとして潜在的に存在している。
- (2) 本論のトランスクリプトで用いる記号の意味するところは以下のとおりである。

文字 強調 (数字) その秒数の間隔 >文字<  
速い発話 ((文字)) 転記者による説明・注釈 h  
呼気音 ° 文字° 弱い発話 . h 吸気音 (.) ご  
くわずかな間隔 <文字> ゆっくりした発話 :  
音の引き伸ばし, 連続イントネーション. 末尾の  
下降イントネーション ? 上昇イントネーション  
= 間隔のない発話交換 (h) 呼気音が言葉に重ね  
て発せられている場合 文字 より強い発音 [オー  
ヴァーラップの開始位置

- (3) 映画『誰がために』(2005) より
- (4) 以下本稿において、クルター (1979 = 1998) からの引用は、原典 pp107-124 の部分については原典から、それ以外の部分については西阪による抄訳からの引用である。
- (5) 映画『ちゃんこ』(2005) より
- (6)、(7) 映画『となり町戦争』(2006) より
- (8) 映画『初恋』(2006) より
- (9) うなずきが一つの発話と同じ機能を持つと考えられる。
- (10) 雑誌『シナリオ』2006年4月号、シナリオ作家協会、p135
- (11) 映画『ハッシュ!』(2001) より
- (12) データ7でも質問-応答連鎖が継続しているが、質問が同じことを聞いているわけではないので、データ1とは区別される。

- (13) 本稿は横浜国立大学大学院教育学研究科に提出された修士論文『会話の中の自己-自己使用のエスノメソドロロジー-』(2008)の一部に加筆・修正を加えたものである。

(文献)

- 浅野智彦、2001、『自己への物語論的接近』勁草書房。
- Coulter,J,1979,*The Social Construction of Mind*, Macmillan., (= 1998、西阪仰訳『心の社会的構成』新曜社)。
- Gergen,K.J & Gergen,M.M,1983, “ Narratives of the Self ” ,T.R.Sabin & K.E.Scheibe eds.,*Studies in Social Identity*,Praeger,pp.254-273.
- Goffman,E,1959,*The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday., (= 1974、石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房)。
- 串田秀也、2006、『相互行為秩序と会話分析』世界思想社。
- Loseke,D、(草柳千早訳)、2003、「ナラティブと自己の構築」『文化と社会』4巻、pp.102-120。
- Mead,G,1934,*Mind,Self,and Society*,The University of Chicago Press., (= 1995、河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社)。
- 西阪仰、1997、『相互行為分析という視点』金子書房。  
——— 2001、『心と行為』岩波書店。
- Psathas,G,1995,*Conversation Analysis*,Sage Publications., (= 1998、北澤裕、小松栄一訳『会話分析の手法』マルジュ社)。
- Sacks,H,1972, “ An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology ” ,D.Sudnow ed.,*Studies in Social Interaction*,The Free Press,pp.31-73., (= 1995、北澤裕、西阪仰訳「会話データの利用法」『日常性の解剖学』マルジュ社)。  
——— 1992,*Lectures on Conversation*, Vol .I-II, Blackwell.
- Sacks,H., Schegloff,E & Jefferson,G,1974 “ A Simplest Systematics for the Organisation of Turn-Taking for Conversation ” ,*Language*,50,pp.696-735.
- 桜井厚・小林多寿子編著、2005、『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房。